

留学生のための物語日本史

第 2 2 話 山本五十六

「山本が生きていたら、何と言っただろうか」

海軍大臣の米内光政（よないみつまさ）¹は、霞が関の海軍省大臣室から空襲で何もなくなつた帝都・東京を見ていた。

「大臣、今何とおっしゃいましたか」

大臣室に入ってきていたのは、海軍次官の井上成美（いのうえしげよし）²であった。

「いや、アメリカとの戦争を始めたのは山本だ。しかし、最もアメリカとの戦争を避けようとしていたのも山本だ。そのアメリカとの戦争で今、帝都・東京はこのような姿になってしまった。国体を守ることもできない、現在の帝国海軍を見て、山本なら何と言うだろうか。そう考えていたのだ」

米内光政はそう言うと窓から目を離し、大臣の椅子に座って井上に向き直った。

「大臣と山本長官と私、三人で『海軍三羽鳥』などと言われていました」

「私は駐ソ連武官、山本君は駐アメリカ武官、君はスイスやフランス、そしてイタリアの武官にも行ったのだっけ」

米内は、机の上にある書類を端に寄せると、すっかり冷めきってしまったお茶を口に運んだ。

空襲で様々なものがなくなってしまったために、大臣であっても、しばらくお湯を飲むのが難

¹米内光政…連合艦隊司令長官・海相を歴任、1940 年組閣。日独伊三国同盟に反対し、陸軍により辞職に追い込まれた。のち海相として戦争終結、敗戦処理に尽力した。

²井上成美…軍務局長・第四艦隊長官・海軍次官などを歴任。米内光政らと日独伊三国同盟に反対。また海軍の空軍化を力説。最後の海軍大将。

しい状態であった。

「駐在武官をやったから外国かぶれしている、などとよく言われました」

井上は、すでに旧知の仲となっている米内光政とは、上下の関係があってもあまりそのことを気にすることもなく、机の前の応接セットの椅子に腰を沈めた。井上は、本来「海軍には無礼講はない」という思想をもっていた。そのために酒の席でも乱れることはなかったし、芸子遊びも全くしないことで有名である。しかし、この時は違った。何か、上下関係だけでは話が進まない雰囲気を感じ取っていたのである。普段、「無礼講はない」と言っているほどの人だけに、逆にそうではない時の雰囲気を感じ取るのも敏感であったのかもしれない。

「もともと、加藤友三郎閣下は、国防は軍人の専有物にあらず。戦争もまた、軍人にてなし得べきものにあらず、としてワシントン軍縮会議³において屈辱的な軍備削減を飲み込んだ。国防は国力に相応ずる武力を備うると同時に、国力を涵養し、一方、外交手段により戦争を避けることが、目下の時勢において国防の本義なりと信ず。これは、山本と同期の堀悌吉（ほりていきち）に加藤閣下が宛てた手紙の中に書いてある。軍隊などというものは使うものではなく、それを利用して外交で戦争を治めるものだ。加藤閣下はそう言いたかったのではないか」

すっかり冷めたお茶の入った湯呑を持つと、米内は井上のほうに移動し、そして応接セットの椅子に腰を下ろした。やはり大臣の椅子と応接セットでは話がしにくかったようだ。

「加藤閣下、堀閣下、そして山本長官、米内大臣に私、これだけ戦争に反対する人がいたのに、どうして戦争になったのでしょうか」

井上はため息交じりに米内に尋ねた。

「誰がやったとか、誰が悪いというわけではない」

³ワシントン会議…1921年、ワシントンで開かれた国際会議。アメリカ大統領ハーディングの提唱により、米・英・日・仏・伊・ポルトガル・ベルギー・オランダ・中国が参加。海軍の主力艦を制限する五か国条約、中国に関する九か国条約、太平洋問題に関する四か国条約が成立し、日英同盟は廃棄された。

米内は何かを言おうとしたが、そこでぐっと言葉を止めた。しばらく、二人の間を沈黙が包んだ。空襲から守るために普段は分厚いカーテンが引かれている海軍省の窓も、完全に開け放たれていた。盛夏に向かう暖かい風が、大臣室の中にそよそよと入ってきて、大臣の机の上の書類を数ページめくった。

「山本は、近衛首相⁴にアメリカとの戦争を聞かれた時、『是非やれと言われれば、初めの半年や一年は、ずいぶん暴れてご覧にいきます』と、大見得を切ったのだ。本当に山本の言うとおりになった。『しかし二年、三年となつては、全く確信は持てません』と言っていた。戦争が始まって早四年。まあ、本当に山本の言うとおりになった」

米内は、窓の外を飛ぶ燕を見ながら、そう言った。

「しかし、飛行機で戦艦を沈める。そんなことを考えるのは、山本長官でしかできないことです」

井上は、米内の視線を追って、その燕を見ながら言った。

「あの燕を見てみろ。我ら人間のほうが力が強くても、結局捕まえることもできない。山本は、そのようなことをすでに見抜いていたのだ。山本は、我々とは全く違う思考の持ち主であった」

「そうですね。飛行機の先進性を見抜いて、その集中運用ということ考えたのは、世界でも山本長官だけでした」

井上は昔を懐かしんだ。

「そうだ。飛行機の先進性に目を付けた山本は、日本がその先進性を生かしている間、当然に、日本が優位であることをわかっていた。彼が言った一年という期間は、そのことだったのであろう。二年、三年と戦争が長期化してしまつては、アメリカも他の国も、飛行機を作る力がついてくる。いつだったか山本は、『アメリカが本気になって飛行機を作り出したら、日本は

⁴近衛文麿…1937年に組閣し、日中戦争に突入した。第2次内閣では日独伊三国同盟を締結、大政翼賛会を結成。第三次内閣で東条英機陸相の対米主戦論を抑えきれず総辞職。戦後、戦犯に指名され服毒自殺。

その生産力ではかなわない。アメリカが本気で作り出す前に、アメリカの艦隊を沈め、そして有利に和平交渉を行うことしかない』と、言っていた。今そんなことを思い出したよ」

米内は、応接セットから立ち上がると、先ほど風でページがめくれた書類を二つ持ってきて、井上の前に並べた。ページを整えて井上のほうに差し出された冊子の一番上には、「ソ連和平仲介構想」という文字と、もう一つには「ポツダム宣言に関する資料」と書かれていた。

「これは」

「先日の閣議の資料だ」

「いよいよ、日本も」

「陸軍大臣の阿南惟幾（あなみこれちか）⁵⁾は、『戦局は依然として互角である』と強がりをおっしゃった。ブーゲンビル、サイパン、レイテ、硫黄島、沖縄、みんな明らかに我がほうは負けている。個々の戦いで武勇談はあるやもしれないが、それは勝敗とは別の問題である、と言いつつ返してやったら、『戦闘には負けているかもしれないが、戦争そのものに負けたとは言えない。陸軍と海軍では感覚が違う』と言っておったわ。現実が見えない奴は困ったものだ」

「ブーゲンビルですか」

「そう、あえてガダルカナルと言わず、山本がいなくなった島の名前を出した。奴が生きていたら、何と言ったか。最近そのようなことばかり考える」

米内は、深くため息をついた。目の前にある書類は戦争中、日本にとっては最も機密性の高い書類であり、誰もがその内容が気になるはずだ。しかし、井上は全く手に取る雰囲気はなかった。

「山本長官が生きていたら、ですか」

「そうだ。本当は、もっと阿南を追求しようと思った。しかし、やはりその時に、山本が出てくるのだ。三国同盟を行った時、山本は、『陸軍との争いを避けたいから同盟を結んだという

⁵⁾阿南惟幾…1939年に陸軍次官となり、三国同盟締結のため米内内閣の倒閣を画策、1945年4月、鈴木貫太郎内閣の陸相として入閣、最高戦争指導会議で本土決戦を準備し、降伏決定を遅らせた。1945年8月15日、割腹自殺。

が、内乱では国は滅びない。戦争では国が滅びる。内乱を避けるために、戦争に賭けるとは、主客転倒もはなはだしい』と、そんなことを叫んでおった」

「はい、覚えております。我ら三国同盟反対派は、多くの人々に罵倒されましたから」

「でも、日本はあの時、陸軍との戦いを避けて、連合国との戦争を選んだ」

米内は、湯呑を取り上げてお茶をすすると、少し間をあけて言葉を続けた。

「その結果がこれだ」

井上の表情は急に引き締まった。海軍次官として、やらなければならないことは、もはや戦うことではなく、どのようにして戦争を終わらせるかであった。井上は、米内とともに普段から、それを理解していたが、しかし、改めて降伏文書を目の前にすると、そのことの重要性や自分にかかった責任の重さを感じるのだ。

「しかし、山本というのは、稀有な人物だ」

米内は井上の真剣な表情を見て、わざと山本に話を戻した。すでにわかりきっているほど、わかっている井上にくどくどと話すつもりはない。そもそも、その重責から最も逃げ出したいのは米内自身であり、また、内閣全員の総意なのだ。

「誰でも、勝ち戦の時は自分が中心になって軍を率いたいと思う。それも、真珠湾攻撃のような大勝利であれば、多くの者が自分がやった、自分が考えたと言う。山本は、そんな時にも、冷静に『単に博打に勝っただけ』と、言っておった」

「『本当に、博打をしないような男はろくなものじゃない』とまで言っていましたね。当時、私は第四艦隊指令をしており、トラック島の巡洋艦・鹿島におぐりましたから、直接伺った話ではありませんが」

井上は、当時を懐かしむように言った。

「トラック島にいたのか。あそこには南洋司令部があったから、山本もよく出かけて行ったよなあ。あの時は、うるさい井上のことを、軍令部総長の及川古志郎が『栄典』としながら、遠ざけたと言われたものだ。私はすでに現役を退いていたから、関係はなかったな。まあ、し

かし、真珠湾で勝った時は、それは大きなお祭りだと思った。しかし、これではただでは済まないと思っていたよ。山本は、『勝ちすぎた』と、ひとこと言っていた。その言葉の意味が数年後、このような形で東京にふりかかるとは思わなかったな」

「山本長官には、今の東京の姿が見えていたのでしょうか」

「山本は、そうならないように精一杯やっていたと思う。負けた時は、みんなそこから逃げたがる。幕引きなどということは誰もやりたくないのだ。だから、なるべく良い形で幕を引こうとしていた。幕を引く汚れ役を行う者がいなくなったので、戦争はここまで来てしまったのだ」

「ミッドウェー海戦の後、南雲中将⁶に、『人は神ではない。誤りをするというところに人間味がある』と、山本長官はそのようにおっしゃっておられました。勝った時は博打と言い、負けた時は人間味と言う。まさに、そんな人でした」

米内は、井上のそのような言葉を背中で聞きながら、窓際に歩み寄った。窓の外には緑が残っている皇居と、その向こう側には、すでに焼け野原になって何もなくなっている東京の真ん中で、多くの人がある日を生きるのに小屋を建て、できる範囲で街を元に戻そうとしていた。

「山本がいれば、『早く戦争を終わらせてほしい』と言ってくるであろう。このような日本を見る前に、とっくに戦争を終わらせていたに違いない。山本がいなくなったのは、日本にとって不幸であったのかもしれない」

「しかし、飛行機で始め飛行機で勝ってきた戦争が、最後飛行機で負け飛行機で国を焼かれるのですね。その山本長官も、飛行機で亡くなってしまった。海軍であったのに、最後まで空の人であったと思います」

井上も立ち上がって、米内の隣に行った。

「神格化されるのが嫌な人だったから、多くの人々が、山本神社を建てると言ってきたが、私

⁶南雲忠一 …1941年12月8日、第一航空艦隊司令長官として真珠湾攻撃を指揮した。翌年6月ミッドウェー海戦で敗れる。サイパン島で自決。

はすべて断った。皇族でも何でも人間が国葬になった。そのことで十分ではないか。博打をして過ちを認め、自分のやりたくない仕事も命令であるとして、国のために命を賭して行く。それが、山本だ。そして、その山本の精神は、これからも日本人の中に生き続ける。精神が生き続けるから、神社などはいらぬ。そういうものだよ」

米内は、軍服の内ポケットから紙を一枚取り出した。

「井上君、読むかね」

その紙には、

「ああ われ何の面目ありて見（まみ）えむ大君に
将又（はたまた）逝きし戦友の父兄に告げむ言葉なし
いざましてばし若人ら死出の名残の一戦を
華々しくも戦ひてやがてあと追ふわれなるぞ」

と書いてあった。

「これは」

「新橋に梅龍と名乗る女性がいる。本名は河合千代子、山本が最も大事にした女性だ。その女性のところに手記が残されている。もちろん、山本五十六が自分のしるしである『56』と書いたものだ。その中に書かれている言葉だ。今の我々の心境にぴったりくると思ってね。君に渡そうと思っていたんだ。山本君からの伝言だと思って受け取ってくれ」

「米内大臣」

「さあ、御前会議だ。ポツダム宣言が話題になる。今日こそ、陸軍と勝負だ。山本の言うとおり、陸軍と戦いたくないから、一億総特攻などということは絶対にさせてはいけぬ。今日は命懸けだよ」

米内光政は笑うと、風呂敷に二つの冊子を入れて、きつく結んだ。

この日、天皇は最高戦争指導会議および閣僚の面前で、再度ポツダム宣言受諾を決定、これにより終戦が最終的に決した。陸軍大臣だった阿南惟幾は終戦の日、当日に「米内を斬れ」と言い残して自決したが、米内本人は軍人として法廷で裁かれる道を選んだ。しかし、米内は戦犯として指名されることはなかった。

23 吉田 茂

「ダグラス・マッカーサー元帥がここにいたら、何と言ったであろうか」

目の前には万国旗がはためき、世界各国から集まったアスリートが、自分の目の前を行進している。そんなにはるか遠くではないところに、天皇・皇后両陛下、皇太子殿下と美智子妃殿下、常陸宮ご夫妻もご臨席だ。反対側には、長きにわたって側近として活躍し、自分の片腕でもあった首相の池田勇人（いけだはやと）が苦しそうに座っている。

「大長老、マッカーサー元帥も私も少々疲れしました。元気なのは、吉田元老だけですよ」

池田は、苦しそうに言った。

総理大臣を辞め、衆議院立候補を見送り政界から引退して何年経つであろう。それでも自分のことを、いまだに「大長老」とか「元老」と呼ぶのは、昭和24年の第24回総選挙で当選した議員ばかりになった感じがある。それでも、その時の議員をもって「吉田学校」などと言われ、その者たちが、みな政治の中心で活躍している。側近であった池田勇人は、財務省官僚から政治家に転身し、首相になってから「もはや戦後ではない」と宣下に、「所得倍增計画」⁷を実施して高度経済成長を成し遂げた。この他にも、次の首相候補といわれている佐藤栄作や、その次のリーダーといわれる田中角栄など、戦前からの「政党人」の系譜ではない、「保守本流」を形成してきている。

「マッカーサー元帥も、まさか、あの焼け野原の日本が十数年で、このようになるとは思ってないであろう。これが日本だよ、池田君。いや、池田総理と言わねばならないね」

吉田茂は政界を引退して大磯の自邸にいた。しかし、「東京オリンピック」という一大式典に、そして戦後の日本が新たなステージに立つ、この時において主賓として開会式に呼ばれていた。

「しかし、日本がこのように見事な復興を遂げた。これは喜ぶべきことではないか。これを

⁷所得倍增計画…1960年に池田内閣の下で策定された長期経済計画。この計画では、翌1961年からの10年間に国民総生産を26兆円に倍增させることを目標に掲げたが、その後の日本経済は計画以上の成長に至った

マッカーサー元帥にも見せてやりたかったな。あいつ何を言っただろうか」

吉田茂は、無邪気な子供のように話をした。

「私自身、こんなに復興できるとは思っていなかったよ。もっともっと復興に時間がかかる
と思っていた」

吉田茂は、アルファベット順に自分たちの前を通る選手団を見ながら、そっと目を閉じて昔
を思い出した。

戦後すぐ、昭和21年4月10日、第22回衆議院議員総選挙が行われた。当然にまだ、大
日本帝国憲法による選挙であった。与党であった幣原喜重郎（しではらきじゅうろう）内閣の日
本進歩党が、前年は勝利したものの敗退し、日本自由党が第一党になった。しかし、党首であ
る鳩山一郎が進駐軍によって公職追放される。その時に首相候補に挙がったのが宮内大臣であ
った松平恒雄だったが、鳩山一郎と松野鶴平の二人の後押しで、なぜか吉田が首相になったの
だ。

吉田茂は政党政治家の多い中、官僚出身者を中心にした自分の派閥を形成する。いわゆる「吉
田学校」である。その吉田学校に広川弘禅（ひろかわこうぜん）や大野伴睦（おおのばんぼく）
らの、ベテラン政党政治家を組み合わせるワンマン体制を作り上げた。この手法に関しては賛
否両論が多い。しかし戦後の混乱期、特に進駐軍と日本政府の「二頭指導体制」であり、なお
かつ、天皇陛下を中心にする政治体制を今もなお信奉するものが少なくない日本の国内、そし
てまだまだ多く海外に残された復員兵のことも考えれば、いちいち協議をし、会議をして行
うような時間的な余裕はなかった。いや「時間的に放置すること」は「敵」であると、彼はその
今までの経験からそう考えていたのだ。

「時間的猶予は敵」という考え方は、彼が太平洋戦争開戦前、ジョセフ・グルー米大使や東
郷茂徳外相らと頻りに面会した。開戦阻止を目指すが実現せず、開戦後は牧野伸顕、元首相近
衛文麿ら重臣グループの連絡役として和平工作に従事し、ミッドウェー海戦大敗を和平の好機

と見て、近衛とともにスイスに赴いて、和平へ導く計画を立てる。しかし、これらも「時間的な猶予」や「無駄な協議」をしていたために計画が頓挫し、その結果、日本人の多くが犠牲になった。やっと自分が中心になって、日本の復興の現場に立った。今度は「無駄な会議で時間を浪費することは敵」であるとし、ワンマンで自分のアイデアをすべて行動に起こすことを重視した。わからない奴は切り捨てる。同じ志をもっているならば、理解を得られる。そのように考えるのが吉田流であった。

「池田君の言うとおりに、まずは国民の生活だ。戦後、池田君が『産業と賃金で生活を安定させましょう』と言ったのは、今でも覚えているよ」

「大長老の行った傾斜生産方式⁸、そして復興金融金庫⁹というのは素晴らしかったです。あの手法をまねて、所得倍増計画を行いました。その結果がこのオリンピックですよ」

「あまり無理するなよ」

「ちょっと癌が見つかっただけです。まあオリンピックは私の高度経済成長の集大成ですから、これが終わらなければ死んでも死に切れませんよ。それに天皇・皇后両陛下、皇太子殿下、美智子妃殿下が来ているのに、首相の私が出ないわけにはいきません」

「代わりなら、私で十分だろうに」

「大長老の申し出でも、そこは譲れませんよ」

池田勇人は、この9月に検査で癌が見つかり、前日まで入院療養をしていた。ちなみに、この14日後、オリンピックの閉会を見届けてから、池田勇人は首相を退陣する。

「しかし……大長老、あの時はやはり付いて行けばよかった、と今でも後悔しております」

池田は、感慨深げに言った。

⁸傾斜生産方式…1946～49年まで、戦後の経済復興のための産業政策の呼称。復興に必要な諸物資のうち、石炭・鉄鋼などの基礎物資の供給力回復が最も急務であるという観点から、これらに資金・人材・資材などを重点投入した。

⁹復興金融金庫…戦後の日本経済の復興のため、復興金融金庫法に基づき1947年1月、全額政府出資で設立された金融機関。主として日本銀行引き受けの復興金融債の発行によって調達した巨額の資金を石炭・鉄鋼などに集中的に融資し、復興に寄与した。

「あの時とは、サンフランシスコか」

「はい。いや最も良いところを、すべて大長老に取られました」

「何を言っておる」

昭和26年9月8日、アメリカのサンフランシスコに渡った吉田茂内閣一行は、第二次世界大戦における、アメリカ合衆国をはじめとする連合国諸国と、日本との間の戦争状態を終結させるために、いわゆる『サンフランシスコ講和条約』¹⁰に調印した。この条約を批准した連合国は日本国の主権を承認し、日本と多くの連合国との間の「戦争状態」が終結した。講和条約には吉田を筆頭に、池田勇人蔵相、国民民主党代表・苫米地義三、自由党代表・星島二郎、参議院緑風会代表・徳川宗敬（とくがわむねよし）、日銀総裁・一萬田尚登（いちまたひさと）の六人全員で署名した。

いったん宿舎に帰った吉田は池田に「君は付いてくるな」と命じると、その足で再び外出した。吉田の一番弟子を自認していた池田勇人は、その命令に背きタクシーに強引に乗り込んだ。吉田は「バカ者」と池田を叱責したが、その後は葉巻に火をつけて何も言わなかった。

向かった先は、ゴールデン・ゲート・ブリッジを眼下に見下ろす、プレシディオ将校クラブの一室。吉田茂は池田に、室内に入ることを固く禁じ、一人で室内に入って行ったのである。この時にクラブで調印したのが、『日米安全保障条約』¹¹であったのだ。

「そりゃそうだろう。日本は、まだまだ戦争に負けないと言っていたんだ。共産党などは、日本国憲法に9条が入っていることで、日本の自衛権が放棄されている、と言って再軍備を主張していたほどだ。あの共産党がだぞ。今では全く逆のことを言っているから、お笑いだがな。日本が軍備を放棄し、そして、それまでの敵のアメリカに守ってもらう。そんな条約に調印して国民の非難を浴びるのは、私一人で十分。君のような軟弱者に責任の一端などを任せておけ

¹⁰サンフランシスコ講和条約…1951年9月サンフランシスコで、ソ連・ポーランド・チェコスロバキアの3か国を除く連合国48か国と日本とにより調印。米国による信託統治、海外領土の放棄などを規定。

¹¹日米安全保障条約…日本の安全を保障するため、米軍の日本駐留などを定めた。1960年、新条約に改定され、軍事行動に関して両国の事前協議・相互協力義務などが新

んわ」

吉田茂は、いつまでも憎まれ口と冗談を言うばかりであった。

「大長老は、任せていただけないと言いつつ、私たちを守ってくださって、ありがたいこと
ございます」

「何言ってる。君に責任の一端を任せていたら、自分だけでなく君まで守らなければなら
ないだろ。そんなのは手間だ」

「しかし、あのような講和条約の席でも葉巻をふかしているのだから、大長老はすごいで
すよね」

「天皇陛下の御前以外はどこも関係ない。あのマッカーサーが自分でたばこ農場を持っ
たから、葉巻を送ると言ってきたことがあった」

「それで、どうしたのですか」

「私はハバナ産しか使わないから、要らないと断ってやったよ。マッカーサーは驚いて、
人々を見下ろしていたよ」

「そういえば、食料が不足している時、盛りましたね。大長老は450万t、マッカーサー
から食料をもらおうと仰っていましたが」

「そうだ、あの時も結局、マッカーサーは70万tしか送ってこなかった。何とかやりくり
して、餓死者を出さなかったら、あのマッカーサーの野郎、『私は70万トンしか出さなかつ
たが、餓死者は出なかったではないか。日本の統計はいい加減で困る』などと、言っ
てきやがった」

吉田茂は、池田勇人と二人で話していると、昔に戻ったように生き生きしている。

「それで大長老は何と」

「『当然でしょう。もし日本の統計が正確だったら、無茶な戦争など致しません。また、統計
どおりだったら日本の勝ち戦だったはずですよ』と、言っ
てやったよ。マッカーサー元帥は大
笑いしていたわ」

この話は、池田は何度も聞いている話であった。しかし、この話をしている時の吉田が最も好きであった。池田からすれば、吉田とマッカーサーだけでなく、アメリカと日本の関係を端的に示している話であると思っていた。何かあった時も、アメリカは要求より低くしか、援助はしてこない。それを真剣に怒ってはいけない。歴史ある、誇りある日本人はそれを余裕で笑い飛ばして、アメリカの鼻を明かさないといけない。そのことが池田の所得倍増計画の中心であった。

「第18回近代オリンピアドを祝い、ここにオリンピック東京大会の開会を宣言します」

天皇陛下が立って、開会の宣言をした。

尊王の士を自認する吉田茂も起立して、天皇陛下のほうに向いた。横で池田勇人が苦しうにしていたが、それでも立って応じている。

「いや、病気というものは怖いもので、天皇陛下の御前であっても、全く容赦しないのです」
座ってから、池田勇人は吉田茂にぼやいた。

「何言う。あの重光葵（しげみつまもる）¹²は国旗掲揚、君が代斉唱中であつたから、暴漢が投げた手榴弾に気づきながらも微動だにせず、そのまま足を失った。たかが病気くらいで何を言うか」

「申し訳ありません」

「池田君、政治など、そこまで無理をするものではない。まずは自分を労り、そして生きて国のために何が出来るかを考えるべきである。その順序を間違えてはならん」

「最後まで、大長老には教えてもらってばかりですな」

池田は苦笑した。

その時、上空をブルーインパルスが大きく五輪を描いて飛んだ。

¹²重光葵…中国公使時代の1932年、上海爆弾事件で右脚を失う。1945年、首席全権としてミズーリ号上で降伏文書に調印。鳩山内閣の副総理・外相として、日ソ国交回復、国連加盟を実現した。

「自衛隊か。あの防衛大学を作ったのも私だ」

「存じております。青のブルーインパルスを育てたのは、あの源田実氏です」

池田は誇らしげに言った。

「戦争中は源田サーカスと言われ、戦争を始めたとも言える真珠湾の英雄だよ。戦争を始めた人物が、今度は日本発の世界への平和の扉を飾る。素晴らしいではないか」

「しかし、病気の私が言うのもよくないですが、大長老は本当に元気ですね。大長老に最後に教えていただかなければならないのは、その健康の秘訣です」

「元気そうなのは外見だけだよ。頭と根性は生まれつき良くないし、口はうまいもの以外、受け付けず、耳のほうは都合の悪いことは一切聞こえん。まあ、しいて言うならば、不老長寿の薬で人を食って生きているからかな。池田君のように誠実に生きていては病気になってしまうよ」

後日、園遊会で天皇に健康を聞かれた時も吉田茂は同じことを言っている。天皇は、さすがにそれでは良くないと思い、「大磯は暖かいだろうね」と、お尋ねになったところ、

「はい、大磯は暖かいのですが、私の懐は寒うございます」

と答えて、その場を笑わせ、その場を和ませていたという伝説が今も伝わっている。

24 田中角栄

「まー、そのー」

テレビの中の物まね芸人が「自分」の真似をしている姿を見て、角栄は笑ってしまった。

「農は、あんなこと言っていたかの」

傍らにおいてあった湯呑を口に運んだが、ほんの少し口をつけただけで、すぐにサイドテーブルに戻した。それもそのはずである。まだテレビで言えばゴールデン・タイムといわれる時間であったが、湯呑の中には角栄の地盤である新潟の銘酒が入っていた。さすがにこの時間から、特に接待や交渉でもないのに、酒を一気に飲み干したりはしない。

「総理、お言葉ではございますが、総理自身も笑っておられましたよ」

ちょうど田中の自邸に遊びに来ていた二階堂進¹³が、田中の傍らで同じように湯呑の中に入れられた銘酒をちびりちびりと飲みながら、田中角栄に声をかけた。

「物まねというのは似すぎていては面白くないんだ、二階堂君。その人のイメージがあつてな、その人の全体のイメージの中で、言葉としぐさを選ばれる。それをあり得ないくらい強調して、見ている人がそれぞれの想像をするから面白いんだよ。ということは、あの、『まー、そのー』という言葉は農のイメージなのか、ということなんだ」

「はい。総理も言葉を大変、選んでお話しされていましてから、『まー、そのー』という言葉はよくお使いになっておられました」

二階堂は全く悪びれずに、田中角栄を批評するようなことを言った。

「それはそうであろう。何しろ、それまで政治を建前で話す者が多かった。いや、政治は建前でしかなかった。しかし、議会制民主主義ってやつは、いや、そもそも多数決ってやつは多数派がすべてを決めるということではないか。そのためには多くの人にわかるように説明しな

¹³二階堂進…中学卒業後渡米。1946年、衆院議員に当選。佐藤内閣で科学技術庁長官、田中内閣で官房長官、党幹事長を歴任。1981年4月党副総裁に。外交通で知米派の代表。長く木曜クラブ（田中派）会長を務め、竹下派独立後も旧田中派を率いていたが、のち無派閥。

ければならない。吉田爺さんも多数派工作は様々にやっていた。そうしなければ自分の政治ができないからだ」

田中角栄は、少々興奮しながら話をした。自分で自分を落ち着けるために、湯呑の酒を少し多めに口に運んだ。

「そうでしたね。私が初当選した昭和21年の総選挙などは、まさに吉田茂首相が、それまでの政党の人々を排除して、自分の派閥を作るための総選挙でした。小坂善太郎・江崎真澄・小沢佐重喜・石井光次郎・坂田道太・水田三喜男・村上勇・川崎秀二・原健三郎・井出一太郎・早川崇・中野四郎、みんなその時、初当選の私と同期の仲間でした」

二階堂進は自分を懐かしむように、そのようなことを言った。

「その現状を『数は力』と言った。集団を維持するには金が必要だ、だから『金は力』と言った。本当のことを言うと、なぜか世間から非難される。何とも住みにくい世の中になったものよ。なあ、二階堂君」

テレビ番組は、いつの間にかニュース番組に替わっていた。ニュース番組ではトップ・ニュースとして、ロッキード事件¹⁴の判決に関して流していた。

「いわゆる、田中氏の政治的影響を一切排除する」

中曽根康弘¹⁵首相は、取り囲まれる記者団に向かって、そのように発言している場面がテレビ画面に打ち出された。テレビには『田中支配崩壊』と大きく文字が書かれていた。二階堂進は、そっとテレビのリモコンに手を伸ばして、チャンネルを変えようとしたが、しかし田中はその二階堂の手を叩き、そしてリモコンを二階堂の手の届かないところに置いた。

¹⁴ロッキード事件…米国ロッキード社の大型旅客機の日本売り込みに際し、多額の賄賂が政界に渡された疑獄事件。1976年の米国上院外交委員会で発覚し、事件当時の首相であった田中角栄をはじめ、政府高官や商社・航空会社幹部らの逮捕・起訴に至り、大政治問題となった。1995年2月、最高裁判決で有罪が確定。

¹⁵中曽根康弘…海軍主計少佐として終戦を迎え、1947年民主党から衆議院議員初当選。長く憲法改正を主張し、保守合同後は自民党で科学技術庁長官・防衛庁長官・通産大臣などを歴任。1982年首相就任。改憲はできなかったものの国鉄・電電公社・日本専売公社民営化を実現し、外交ではレーガン米大統領との盟友関係を築いた。

「面白いではないか。中曽根君は、なかなか役者だよ」

田中は、少し悲しそうに笑顔を浮かべながら、そのままテレビを見ていた。

この前日、1983年12月18日、いわゆる「田中判決選挙」があり、中曽根康弘率いる自民党が大敗したのである。翌19日、東京に凱旋していた田中角栄をお見舞いに、二階堂進は田中邸に来ていたのだ。ここに来る直前に、二階堂進は、選挙の大敗の責任を取る形で、自民党幹事長の辞任届を平河町の自民党本部に出してきたばかりである。中曽根首相の談話は、その二階堂進・幹事長辞任に関するコメントである。

「私の行動で、親父さんにまで迷惑かけまして」

二階堂進は、田中角栄に向かって軽く頭を下げた。

選挙後の混乱の雰囲気から、やっと世の中は日常を取り戻した感じであった。東京・目白の田中邸の前にはマスコミが、まるで一足早い初詣の神社のように人だかりが、黒い山になっていた。しかし、田中角栄も二階堂進も、全くそれらを気にする風もなかったのだ。

「ロッキードでは大変でした」

「儂は今でも、おかしいことはしていないと思っている」

「しかし、あれは陰謀とか冤罪とか……」

「そうではない。今、このようになって、やらなければならないことは三つだ。第一は、できるだけ敵を減らしていくこと。世の中は、嫉妬とソロバンだ。インテリほどヤキモチが多い。人は自らの損得で動くということだ。第二は自分に少しでも好意をもった、広い中間層を握ること。第三は人間の機微、人情の機微を知ることだ」

「はい」

二階堂は何も言うことができなかった。二階堂は個人的には冤罪であるとは思えなかった。総理大臣として、本来ならば日本国ために行ったことが、「有罪」という結果になる。しかし、田中角栄は選挙区で22万票も取って再選したのである。何よりもそれが国民の答えなのである。

「二階堂君、僕はロッキード事件というトラバサミにかけられた。足を捕られたほうが悪いのか、トラバサミを仕掛けたほうが悪いのか、それは後世の学者が判断するもの。そう思わなかね」

「はい」

「嫉妬で動く、他人の悪口ばかりを言って自分の意見もなく、何もできない連中が中心になる。実はこれからの日本が心配なんだよ」

すでにニュースは選挙の話から変わっていた。どこだか、わからないが、広々とした田園風景が移っており、その前で女性のレポーターが何かを話していた。

「おい」

田中角栄は、何かを思いついたように奥にいる家人に声をかけた。まだ田中邸には、数人の使用人がいた。

「外にいる連中に、熱燗とお茶を振る舞ってやれ」

「マスコミの連中にですか」

家人は、驚いたように言った。

「寒い中で、ずっと待っているのだ。少し体を温めんと風邪をひいてしまうだろう。あったかいものでも飲んでもらったらどうか。帰れとか言うなよ。彼らも仕事だ。そのうち俺が出てきて何か言うのを待っている。国民が期待していれば、何かをしてやらなければならないのが政治家だ。でも、今じゃない。だから、それまであったかいものでも飲んでゆっくりしておいてもらえ。いいな」

「はい」

「それと、少し多めに持って行け。通行人にも迷惑をかけているんだから、通りがかりの人すべてに出してやれ」

「かしこまりました」

「あと、ご近所にお菓子折りを持って挨拶に行きなさい。うるさくして申し訳ないと」

「それはすでに回りました」

「よっしゃ」

田中はそう言うと、家人に向こうに行くよう右手を振った。家人は頭を下げて、そのまま部屋を下がっていった。

「記者に、振る舞い酒ですか」

二階堂は驚いた。

「本来ならば、選挙当選の振る舞い酒だろう。でも、ロッキード事件でそういうことも言っていられないから、まあ、静かにな」

田中角栄は面白そうに笑った。これだけ一緒にいる二階堂にもわからない、田中の「人たらし」術は、このようなものであった。

「私の選挙区で、ずっと福田（赳夫）さんの支持者がいました。私の選挙の時は、必ず反対運動をする人でした。親父さん（田中角栄）が、幹事長の時に、その人が病気になって、入院しましてね、福田さんは電報を送ってきましたが、親父さんは、お見舞金を持って、わざわざ日帰りで鹿児島までいらっしゃいましたね。あの時以来、その人は親父さんのファンで、私の後援会長をしております。今ふと、そんなことを思い出しました」

「そうか、せっかく思い出したのに悪いが、そのようなものは忘れてしまえ」

「どうして」

二階堂は驚いて言った。

「他人に、何かしてあげたことは忘れろ。他人にしてもらったことは忘れるな。必ず倍以上にして返せ。それでなければ、その後援会長が君にしてくれたことに、二階堂君が感謝できなくなってしまうだろ」

「はい」

「この、日本を高速道路と新幹線でつないで、経済的に発展させる¹⁶。そのことによって日本

は飛躍的に発展した。しかし、その発展を国民は当然のことと思い、農が自民党が頑張ったということなどはすべて忘れ、人の悪口だけを言うのだ。世界中で内戦や戦争があり、飢餓で苦しんでいる国民が多いのに、日本は餓死者もなく、みんな楽しく暮らしている。その楽しみの中に、農を悪くするという嫉妬が生まれている。それだけではないか。それが日本なんだよ」

田中は、湯呑の底のほうに残っている酒を一気に飲み干すと、傍らに置いてある一升瓶から手酌で湯呑の中に注ぎ足した。

「ところで、二階堂君。私が総理大臣だった時、誰だったか幼稚園くらいの子供が来ていたな」

田中角栄は、ふと思い出したように言った。

「はい、伊豆栄でウナギを一緒に食べました。なんか、利発そうなお子さんでしたね」

「なんだか、タクシーか、何かの件で来たと思ったが」

「そうでした」

「あの子、調べておいてくれるか」

田中角栄は、今までのニュースの時の表情とは全く違う、総理大臣の時に日本をどうするかと、希望に満ちた時の表情で語った。

「はい。しかし、あの時は驚きました。幼稚園の子供を上座に座らせて、その父を隣に座らせて、私と中曽根君だったと思いますが、二人で総理が上座だといったら、親父さんにずいぶんと怒られました」

「そりゃそうだ。子供は将来の日本を背負って立つ。農は小学校卒業で総理になった。小学校にいる時に、農が総理になるなんて思った人はいない。しかし、今になって『総理』と言って近付いてくる者は、たくさんいる。しかし、あの子供は、将来日本の総理ではなく、世界の

¹⁶日本改造論…田中角栄が1972年に発表した政策綱領、および同名の著書。田中は「工業再配置と交通・情報通信の全国的ネットワークの形成をテコにして、人とカネとモノの流れを巨大都市から地方に逆流させる“地方分散”を推進すること」を主旨とした、事実上の政権公約を掲げて同年7月の総裁選で勝利し、内閣総理大臣となった。

大統領になり、そして宇宙一の存在になるかもしれない。そんな将来の可能性のある子供は、国の宝であり、そして我々よりもはるかに偉い存在なんだよ。その時の肩書や権力ではなく、その人の可能性を考える。あの時、二階堂君はそのことがわかっていなかったな」

「今、手酌をして思い出されまたね。あの時、オレンジジュースをお酌されていましたから」

「そうだ。将来の希望を感じていたことを覚えているのは、あのような子供に将来の日本を託す。そして、その子供を育てる。それが我々の最後の仕事ではないかな。日本の将来を明るくする、それを担う人を育てる。ロッキードも何もない。未来なんだよ、二階堂君」

「おっしゃるとおりです」

田中角栄は急に立ち上がると、二階堂に、その場に座って待つように手で静止した。その表情は非常に明るかった。

「将来のことが気になる。ちょっとマスコミをからかってくるよ。君は少し、ここで待っていてくれたまえ」

田中角栄は笑って、現職の総理大臣の時のように右手を上げると、何か晴れ晴れしい表情で部屋を後にした。